めざめ

散ってゆく羊のむれが
おのづからか集まるように
雨雲は山陰にかくれ沈み
いま拭はれた空の深みに
宵星は眠さめるよ
一つ又ひとつ。
そしてまたうら若い母の胸にも
まじまじとこころ映して
見つめ時をうつす眼を覚ます。
空からの慰さに
空からの慰さに。

湖

ひよう〳〵と嵐は荒び
嶺の岩々どよもしあふに
山陰のひとつの湖は
恐ぶ雲の影にも答へず
鉛色の瞳を虚しく開く

光の山も雲をはかつて
ものすべて沈黙する
物憂さへ指に困れぬ
うつ〳〵とうち眠覚めて
湖は唯おのれをみつむ

囲む嶺々花をは塗り
反逆ふ獣の獰猛ぶり
くろ〳〵と重く澱みて
湖は唯おのれを守る

されどいと夜
水面の雲りを走りゆく
ひとすじふたすじ
流れゆく水脈のすがた
出かん又出かん
遠く海のかたを指す

峠三吉